




# 支援員だより

発行者：山口県・財団法人山口県ひとづくり財団

## もくじ

- 
- P 1 支援員さんの声
  - P 2 ニホンアワサンゴについて
  - P 3 お便りページ  
「秋吉台とわたし」
  - P 4 講師寄稿「むしへの思い」

## 支援員さんの声



日々の生活の中での自然に対する思いをお寄せいただきました。

今回は、藤永勝喜さんの声をご紹介します

### 「季節のなかで」

支援員 藤永勝喜

定年後山口県の中山間地である農村地域に住むようになって8年目の正月を雪の中で迎えました。今年の冬は例年になく寒さが厳しい。庭の樹木も雪をかぶってじっとしている。その芽はかじかんだように凍えています。ただシロモクレンの芽はこの雪が溶ければ、すぐに芽吹いてやろうと大きくふくらんで身がまえています。「もうすぐ春がくるぞ」「もう少し待てば暖かい春が来るぞ」と声をかけてやります。

今朝も寒かったが、太陽はまぶしく積雪を銀色に光らせています。雪は人間にも動植物にも大変で雪害という言葉もありますが、雪景色は本当にきれいです。

雪が溶けて山は萌ぎ色に変わり、やがて新緑（深緑）となります。新緑が芽吹いてくると「こぶし」が咲きはじめます。自宅から2～3km先の山では「こぶし」の白い花がたくさん咲き、山を美しく彩り、目にもやさしい。待ち遠しい景色です。昔の人は、その花の咲くのを待って苗代をつくり種籾をまき始めたそうです。

4月になると満開の桜がこちらを向いて「にっこり」と笑ってくれるだろう。その時期になると山野草が芽吹き花をさかせます。

大地からいただく味覚があります。冬には、猪肉の「ポタンなべ」。これを食べると風邪を引きにくいといわれます。事実、身体がポカポカと暖まります。

春には、フキノトウ、ツクシ、タラの芽、セリがあり、美味です。その他に、最近ではコシアブラの芽も人気になってきました。私はハリギリの芽が好きです。スイバ、イタドリ、アカザ等は食べる人が少なくなってきましたが、我が家ではちゃんと食膳をにぎわしてくれます。

秋の冷え込みは紅葉を美しくします。紅葉は、赤、黄、茶色と彩って山を飾ってくれます。そして秋の味覚「キノコ」のシーズンとなります。最近「マツタケ」以外の栽培「キノコ」をたくさんスーパーで見かけるようになりましたが、自然のものは一段と美味しいです。



川での楽しみもあります。春は「ヤマメ」を主とする溪流釣り。昔と比べウナギも減少し、アユも小型になったと感じますが、夏も魚を捕ったり、すくったりして楽しく遊ぶことができます。最近子ども達の遊びの中に「ハエツリ」等の魚釣りの遊びが少なくなったのが寂しいです。子ども達が自然に目を向けるようにしていく必要があると感じています。

サラリーマン時代、都会での生活でしたが、夏の暑さはこたえました。コンクリートとアスファルトの熱反射とエアコンの室外機の熱風は本当に嫌な暑さでした。そして冬期はビルとビルとの間から吹き抜ける風は肌をさすような冷たさでした。この両極が私の田舎への生活へと背中を押したのかと思います。

日本の自然、四季の中で生きている人間と動植物との共存共栄を考え、恵みを受けながら、ゆっくりと生活していきたいと思ひます。（1月末日）

# ニホンアワサンゴ群生地（周防大島町）について

山口県自然保護課

環境省は周防大島町東和地区沖において、世界最大級とも言われるニホンアワサンゴの群生地について、去る1月28日と2月13日に、海域公園地区指定に向けた予備調査を行いました。今回は、このニホンアワサンゴ群生地の保護に向けた取組について、ご紹介します。

## 1. 周防大島町のニホンアワサンゴ

ニホンアワサンゴとは、12本の触手と骨格を持つ東アジア固有のサンゴです。国内では種子島から千葉県沖の暖流を中心に生育が確認されていましたが、冬場の水温が低くなる瀬戸内海には、これまで生育していないと考えられていました。

周防大島町では、20年ほど前から周辺海域を海中観察するダイバーにその存在を知られていたようですが、当時は海藻だと思われニホンアワサンゴと判明したのは、今から約10年前のことです。

2009年6月より、NPO法人「自然と釣りのネットワーク」によって調査・保護活動が始まり、その結果、生息域は約800㎡にも達し、世界最大級であることが明らかとなりました。



(ニホンアワサンゴ群生地)

この調査を契機として、地元では、ニホンアワサンゴを保護しようとする活動が活発化しました。調査を行ったNPO法人、さらには地元の漁協から、相次いで生育地保護を求める声が上がリ、周辺一帯海域の「海域公園地区」指定に向けた要望書が町へ提出されました。こうした動きを受け、昨年11月周防大島町でも、環境省に対して海域公園地区指定に向けた調査、検討を要望しました。

## 2. 海域保護に向けた国の取組

昨年10月に名古屋で開催されたCOP10では、2020年までに生物多様性保全のため、地球上のどの程度の面積を保護地域とすべきかという課題について、「少なくとも陸域17%、海域10%」を保護地域などにより保全する必要があるとの目標が設定されました。



(ニホンアワサンゴ)

環境省でも、平成22年4月に自然公園法を改正し、「海中公園地区」を「海域公園地区」に改め、海域における保全施策の充実を図るとともに、COP10に合わせて名古屋市で開かれた国際会議「オーシャンズ・デイ・アット・ナゴヤ」で、海域公園地区を2012年度末までに2009年の約2倍（約4,700ha）に拡大することを報告しました。

自然保護課としても、ニホンアワサンゴ生育地の保全に向けた今後の取組について、注意深く見守っていきたいと考えています。

支援員の皆さんも、是非関心をもっていただけたらと思います。



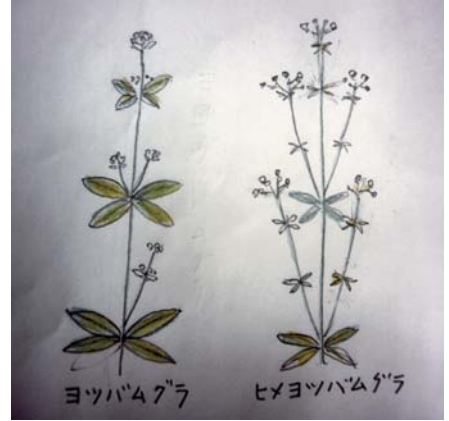
(注) ニホンアワサンゴ群生地及びニホンアワサンゴの写真については藤本正明氏提供

# 秋吉台とわたし



支援員 多賀谷三枝子

今から27年前、その頃の秋吉台科学博物館長の庫本正先生に「掃除をする人にやめられて困っている。ちょっとの間でいいから来てくれませんか？」と頼まれました。一瞬「えっ？」と思ったけれどお引き受けしました。庫本先生は、お昼休みにはよく草原に連れ出して花の名前を教えてくださいました。はじめてホタルカズラの群生を見た時の感動は忘れられません。ある日、草取りをしていたら塩見先生が通りかかられました。塩見先生は植物の先生ということは存じ上げていたので、持っていた草の名を伺ったら「ヨツバムグラかヒメヨツバムグラだが、ひと月して花が咲いたらわかる」とおっしゃいました。それっきり忘れていたら「あれはヨツバムグラじゃったよ」と。そしてそれぞれの違いを教えてくださいました。掃除のおばさんの質問に1ヶ月後忘れずに答えてくださった先生に、その場で弟子にさせていただきました。それからはずっと塩見先生が連れ出してくださいました。地学の学芸員さんにもいろいろ教えていただきました。今していることの大もとは、その頃にできたと思います。



(絵：多賀谷 三枝子さん)

秋吉台では、貴重な出会いが多くありました。塩見先生に紹介されて知った松井茂生さんにはもう20年余りお世話になっています。

「秋吉台で出会った花」の著者中沢妙子さんとも10年以上、今も秋吉台エコツアーのインタープリターとしてご一緒しています。友人は植物好きな人が多いが、植物以外のいろいろな専門家の先生方にもお見知りおきいただいて、何でも教えていただけるのはありがたいと思います。

今の仕事は、エコツアーの他に、植物に詳しい仲間たちとグループ分けして帰化植物の調査と絶滅危惧種の調査をしています。少年自然の家とか小学校、草原ふれあいプロジェクトの草刈や調査、山焼き、80歳の体力でできることは手伝うようにしています。

秋吉台は、石灰岩の山なので洞窟が多くあります。穴の開口部は夏涼しい所と冬暖かい所があつて、ふつつこのあたりには生育していない植物が見られます。また、草原が少なくなって草原の植物も珍しがられます。自然観察会では、貴重な植物のない場所を選んで歩きます。生々しい掘り跡やGPSを使う人の話を恐れて、いいものをお目に掛けられないのが悲しいです。

## 多賀谷さんに4月の活動を伺いました。



◇4月9日秋吉台エコツアー「春風に誘われて一草原～林を散策しよう」で中沢妙子さん、宮田文子さんと一緒にインタープリターをします。年4回、同一コースを歩いて四季の変化を観察してみようという企画です。



インタープリター（自然解説者）は秋吉台が大好きだから、惚れているからできることです。自分が惚れている相手（秋吉台）を認めてもらいたいと思うから。他にも、4月には週末ごとに秋吉台エコツアーが行われています。申込をされて、ご参加ください。

◇4月3日に私のグループは、外来種・帰化植物と絶滅危惧種の調査を実施します。昨年の秋から始めました。数が減っているいくつかの植物は、個体数も調べています。今では、山口県絶滅危惧種ⅠA類となったキンポウゲ科の「オキナグサ」は、昔はどこにでもあった花です。それが、盗掘等により本当に数が減ってしまいました。今でも盗掘されたばかりの跡を見つけることがあります。GPS等で植物がある正確な位置がわかると盗掘にあう危険が増えてしまいます。植物は、持ち帰っても育たないと思います。当然、盗掘にあった場所からは、植物はなくなってしまいます。希少な植物や秋吉台固有のものが失われているのです。



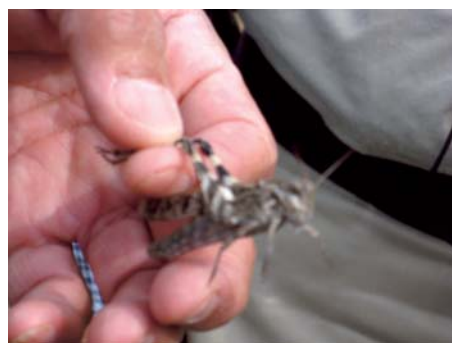
# むしへの思い（観察会で思ったこと）



講師 五味 清（山口むしの会）

2010年10月19日に周南市八代で“むしの観察会”が開催され講師として参加しました。幸い穏やかな天候に恵まれ、わずか1時間半ほどの野外観察でしたがモンシロチョウ・ヤマトシジミ・ツマグロヒョウモンの他、ヒメアカタテハ・キタテハ・アカタテハなどの越冬蝶、またマユタテアカネ・ナツアカネ・オオアオイトトンボ・ハグロトンボ、さらにバツヤやスズメバチなどが次々と姿を見せてくれました。参加者は私と同世代の年配の方も多く、そっとチョウに近寄ったり、恐る恐るバツヤに触れたり、夢中な様子でした。私達の年代は子どものころの遊び場はもっぱら林や小川で、遊び相手は小鳥や魚や虫達でした。いじめっ子の肩車でクワガタを捕ったり、泣き虫つと野イチゴを分けあって食べたり、宿題など全く忘れ、薄暗くなるまで遊んだものです。童心に戻ったような皆さんとご一緒し、子どものころを思い出し、人は自然の中に身を置くとき日常の煩わしいことは忘れ純粋な気持ちになるものだと思います。

人は虫をはじめ、生き物達からこの癒しをもらいますが、人は生き物達に何を贈れば良いのでしょうか。お互いにメリットがなければ共生とは云えません。里山の保全も生き物達へのお返しの一つです。元々、里山は人間が自然に手を加え作り出した空間ですが、それが生き物達にとって居心地が良く世代を繰り返すために格好な場所となり長く共存してきました。しかし、燃料革命で雑木林は荒廃し、小川の土手はコンクリートに代わり、休耕田はセイタカアワダチソウに埋め尽くされています。人は文化的で快適な生活を常に求めているもので、いまさら里山を維持しようとしても難しい課題ですが、形を変えてでもこの環境を次世代に残したいと思う気持ちは持ち続けようと思いました。



## 本年度研修会アンケートのご意見欄より抜粋

- ◆ 質問「支援員活動・研修会に対するご意見をお聞かせください」
    - ・小学校の児童のみなさんの活動について感動しました。ガイド活動～分かりやすく伝える活動…今の子どもさんに大切なことと思います。
    - ・もう少し野外活動の時間がほしい。
    - ・多方面の知識を身につけたいと思います。
    - ・研修会を度々お願いします。
    - ・フィールドもあり、とても楽しかった。
    - ・希少動植物の保全活動のあり方について、討議する機会を設けていただきたい。
    - ・まだ、知らないこともたっぷりありますが、今後も機会あるごとに参加し、また周りの人にも伝えていきたいと思います。自分としては、海辺の植物に興味があります。
- 次年度の取組に活かしていきたいと思っています。貴重なご意見をありがとうございました。



発行元：(財)山口県ひとつづくり財団 県民学習部 環境学習推進センター  
〒754-0893 山口市秋穂二島 1062 TEL 083-987-1110 FAX 083-987-1720  
<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/>

